

それぞれの Border と Border Studies

—A B S 年次大会参加記—

4月14日～17日、ネバダ州リノで開催されたA B S (Association for Borderland Studies) 年次大会へ、本プログラムの渡航助成により参加させて頂いた。国境を巡る様々なテーマの研究発表が行われ、自身の研究を改めて見つめなおす良い機会を与えて頂いた。多彩なプログラムの中から、17日に行われたものについてご報告させて頂きたいと思う。

午前8時から行われた Panel22 では南デンマーク大の Martin Clatt 准教授が、受講する学生の専門領域が多岐に渡る国境・境界領域研究の授業で、どこに専門的力点を置くかということの難しさと今後の課題について報告がなされ、議論が白熱した。また、カナダ・ビクトリア大の Emmanuel Brunet-Jailly 教授の発表の中では本プログラム「境界領域研究の拠点形成」について紹介がなされた。Brunet-Jailly 教授は、昨年12月に北大で開催されたシンポジウム「世界のボーダースタディーズとの邂逅」と根室で開催された国境サミットについて言及され、本プログラムが世界で最も予算規模の大きい境界領域研究のプロジェクトであり、新しい試みを行っているこのプロジェクトに成果が期待されると述べられ、自身もそのメンバーの一員として参加していることを誇りに思う、という言葉で締めくくられた。

一方、次の時間帯に行われた Panel24 では、ミシガン大学のマヌエル・チャベス氏による報告“Immigration News Media Coverage Analysis of the U.S. National Press and Its Trends on Public Opinion”が行われた。チャベス氏はアメリカ・メキシコ間の国境に関する大衆意識が、いかにメディアによって大きく影響されているか、あるいは操作されているかということについて、ナショナル・プレス紙で掲載されたアメリカ・メキシコ間の国境に関する記事の件数、内容、取り上げられ方などの傾向についての分析をもとに、同時期に行った意識調査の結果との関係性を通して、メディアにおけるアメリカ・メキシコ間の国境の表象のありかたについて報告を行った。

報告では、メディアにおける米墨の国境の表象のあり方は「わたしたちの」国境であるか「あなたがたの」国境であるかによって、大きく異なることが指摘されたが、これが米墨間に限ったことではないことは周知の事実である。我が国に関していえば、中国、韓国、ロシアとの間にその問題は横たわり、双方のメディアではやはり米墨間と同じように「わたしたちの」「あなたがたの」というスタンスが表象の根底にある。相互離反性を本質的に抱えている多面的で（この場合、「わたしたち」が表で「あなたがた」が裏、という解釈が絶対的前提条件として相互に潜在している場合が多いのであろうが）相互不可分の Border という構築物は、誰が語るのかによってその姿を大きく変えられてしまうのかもしれない。

佐藤 由紀（早稲田大学）